

【参考】ワイズユース(賢明な利用)の事例 ①

漁業

シジミ日本一の産地における 徹底した資源管理

～宍道湖～

宍道湖は、淡水と海水が入り交じる汽水湖で、シジミの全国漁獲量の約40%を占める日本一の産地です。ここで獲れるヤマトシジミは「宍道湖しじみ」としてブランド化されており、全国的に有名です。シジミは餌の植物プランクトンなどとともに湖水を吸い込んで吐き出すことにより、水をろ過しており、水質浄化に貢献しています。またシジミの漁獲によって、湖の有機物を除去することができるので、富栄養化の軽減にもつながります。

シジミは4メートルより深いところには生息できないため、宍道湖での生息適地は湖全体の3分の1しかありません。宍道湖漁業協同組合では、禁漁区の設定、漁獲量の制限、違反者に対する罰則の規定などにより、自主的な資源管理を行っています。



高品質ブランド商品「カキえもん」と 湖の水質保全の取り組み

～厚岸湖・別寒辺牛湿原～

内湾の厚岸湾と汽水湖の厚岸湖では、カキやアサリの養殖が盛ん。特にカキについては、近年になって漁協の徹底した管理の下で品質を高めています。地元産の稚貝にこだわって育てたブランド商品「カキえもん」は、東京の有名店でも使われるなど、高い評価と人気を得ています。

おいしく安全なカキを継続的に生産していくためには、湖の水質保全がとて重要になります。厚岸では、漁協が先頭に立って、合成洗剤を石けんに転換する運動を始めました。今では町民のほとんどが協力しています。また、湖に流入する河川の上流部の森林が豊かであることも、カキの漁獲を支えているため、町をあげて植林活動を行うなど、広い視野で湖の環境保全に努めています。



【参考】ウィズユース(賢明な利用)の事例 ②

農業

生きものあふれるたんぼでつくる 「ふゆみずたんぼ米」

～蕪栗沼・周辺水田～

宮城県の蕪栗沼は、例年数万羽のマガンが飛来して冬をすごす、国内有数のマガンの越冬地です。沼の周辺の水田では、収穫を終えた冬の水田に浅く水を張っておく「ふゆみずたんぼ(冬期湛水水田)」が行われています。「ふゆみずたんぼ」は、飛来したマガンやハクチョウ類に羽を休める場所を提供するばかりでなく、イトミミズがつくる「とろとろ層」による抑草効果や糞による農地の肥沃化など、農家にとっても恩恵をもたらしています。

このような取り組みが評価され、蕪栗沼だけではなく、沼をとりまく水田も一体のものとしてラムサール条約湿地に登録されました。ふゆみずたんぼで無農薬・無化学肥料で作られた「ふゆみずたんぼ米」は、渡り鳥と人間との共生をアピールする特産品として販売されています。



潟普請や水位管理による管理と利用

～佐潟～

佐潟は、ハクチョウ類の飛来地として、また、オニバスをはじめ希少な水生植物の自生地として知られています。昔から、地域の人々によって、農業用水としての利用や漁業、蓮根の採取などが行なわれ、夏は、村をあげて湖底の枯れた植物やドロの清掃活動「潟普請」をおこない、春はドロを岸辺の潟田にあげて有機肥料として利用するなど、人々の暮らしと密接に関係しながら潟が保全されてきた歴史がありました。

近年は、社会環境の変化や潟の自然遷移が進んでいく中で、かつての活動を参考に、現代版「潟普請」を地元住民が主体となり、NGO、行政の協力を得て実施しています。また、保全の視点からの伝統的な水位管理も地元住民の手で行われているほか、コイ・フナ漁、盆花用のハスの花取り、蓮根採取などが引き継がれ、行われています。



【参考】ウィズユース(賢明な利用)の事例 ③

観光

官民の協力による湿原保全と 入山者対策

～尾瀬～

高層湿原が広がる尾瀬は、国立公園の核心部として原生的な自然が保たれています。一方、年間35万人程度の入山者があるため、自然環境に負荷をかけない利用が課題となっています。このため、尾瀬保護財団を始め、関係行政機関、自治体、事業者などの連携・協力により、自然保護と観光利用の両立を目指した取り組みが進められています。湿原には木道が整備されているほか、マイカー規制、ゴミ持ち帰り運動や公衆トイレの整備、湿原の植生復元事業などが行われています。同時に、ビジターセンターや案内標識などの施設整備により、利用面の充実化も図られています。

高層湿原の観光地としては、ほかに奥日光の湿原、雨竜沼湿原などが知られています。



日本最大のカルスト地形、国内最大級の鍾乳洞

～秋吉台地下水系～

日本最大のカルスト台地、秋吉台の地下にある鍾乳洞、秋芳洞には、年間約90万人の観光客が訪れます。約10キロメートルの総延長のうち、約1キロメートルが観光用に公開されています。洞内は、年間を通じて気温が17℃と一定で、百枚皿、黄金柱、千畳敷などと名づけられた、長い年月をかけて形成された自然の造形美を楽しむことができます。

ここには、地元詳しいスタッフが、未公開洞窟の探検や秋吉台の草原ウォーキングのガイドなどを行う「秋吉台観光ディレクター制度」があります。観光客の要望にきめ細かく対応し、満足度を高める工夫がなされています。



【参考】ワイズユース(賢明な利用)の事例 ④

憩い

湖のある風景が地元の誇りに

～宍道湖、三方五湖～

シジミで知られる宍道湖は、湖に浮かぶ嫁ヶ島をバックに沈む夕日の美しさでも有名です。日没時になると多くの人々が湖畔を訪れ、一日の疲れを癒したり、会話を楽しんだりしており、湖に映える美しい夕日は地元の誇りになっています。夕日鑑賞スポットやサンセットクルージングなど、夕日をじっくり楽しむ方法も豊富に用意されています。

三方五湖は、日本海とつながる5つの湖の色が微妙に違って見えることから、「五色の湖」とも呼ばれています。美しい湖の景色を堪能できるドライブコースや遊覧船があり、訪れる人々にと

って魅力になっています。湖の環境を守るため、地元ボランティアによる清掃活動、学校での環境学習などを通じて環境保全活動が行われています。



春を告げる野焼きが維持する湿原景観

～くじゅう坊ガツル・タデ原湿原～

くじゅう坊ガツル・タデ原湿原は、九重火山群に囲まれた盆地や山麓に形成された中間湿原です。湿原特有の植物群落や希少植物が見られ、火山と草原が織りなす美しい景観と点在する温泉を求めて多くの観光客が訪れます。ミヤマキリシマが咲く初夏や夏山シーズン、秋の紅葉の時期はとくににぎわいをみせます。

この湿原景観は、地元の人々がボランティアの協力を得て毎年行っている野焼きによって維持されています。湿原は放っておくと森林に移行してしまうため、低木が茂らないよう、毎年春先に火を入れて枯れ草を焼きます。野焼きは重労働を伴いますが、焼いた後には新しい草が芽吹き、夏には鮮やかな緑の湿原になります。



【参考】ウィズユース(賢明な利用)の事例 ⑤

遊 び

自然に配慮して遊ぶ

～クッチャロ湖、霧多布湿原など～

クッチャロ湖、ウトナイ湖、風蓮湖・春国岱、仏沼、伊豆沼・内沼、谷津干潟、藤前干潟、琵琶湖など、数多くの湿地は渡り鳥の重要な飛来地となっており、遠く海を越えて渡って来た鳥たちを観察するバードウォッチングが盛んです。これらの湿地では、観察施設などでフィールドマナーの指導がなされているほか、自然環境の保全のため、鳥類生息調査や水質調査、清掃活動などが行われています。

霧多布湿原では、NPO、民間業者などにより、カヌーや湿原ガイドウォーク、昆布干し体験など、湿原の四季と地元産業を体感できるエコツアーが多数実施されています。厚岸湖・別寒辺牛湿原では、タンチョウの繁殖への影響軽減のため、カヌーの1日

の乗り入れ数を制限しています。

年間10万人以上のダイバーが訪れる慶良間諸島海域では、ダイバーや錨によるサンゴの損傷を防ぐため、地元の自治体、観光業者、漁協などにより、係留ブイの設置やダイビングの規制区域を設けるなどの自主的取組がされています。黒潮の影響でサンゴ群集がみられる串本沿岸海域でも、ダイバーへのマナー徹底を図り、サンゴの保全に努めています。



【参考】ワイズユース(賢明な利用)の事例 ⑥

知恵と技

「打瀬舟」による穏やかな漁法

～野付半島・野付湾～

野付半島の砂嘴に囲まれた野付湾では、浅い湾内に広大な海草のアマモ群落広がっており、ホッカイシマエビの生息場所になっています。ここでは、漁船のスクリューでアマモを傷つけないよう、動力を使わず風の力を利用した漁法をとっています。白い三角形の帆をあげた船「打瀬舟(うたせぶね)」を流しながら網を引く独特の漁法は、明治時代から続けられており、夏から秋の野付湾の風物詩になっています。また漁協では、漁期や1日の漁獲量、網目の大きさなどを制限し、厳しい資源管理を行っています。



す。穏やかな漁法により餌を使わないで獲るため、ひげ1本も折れていない、臭みのない優良なエビが獲れ、高値で取引されています。

命のゆりかご、ヨシの保全と活用

～琵琶湖～

日本最大の湖である琵琶湖の湖岸は、かつて広大なヨシ原に覆われていましたが、干拓や開発により、その多くが消失しました。ヨシ群落は、魚の産卵場所や稚魚の生息場所の提供、水質浄化、湖岸の浸食防止など、さまざまな機能を持っています。滋賀県では、ヨシ群落の果たす役割を見直し、1992年にヨシ群落の保全に関する条例を制定しました。この条例に基づき、ヨシの植栽や刈り取り、清掃などが県民の参加も得ながら行われています。刈り取られたヨシは、腐葉土やヨシ紙への加工に加えて、「びわ湖ヨシたいまつまつり」などのイベントや環境学習で活用されています。

